



講義をされる亀井先生▲

授業紹介

「健康と医薬品」

第四回目は「健やかに生きる」を主題とした全学部生対象の教養教育科目「健康と医薬品」です。

われわれの生活から切っても切り離せないのが医薬品。知っているようで知らない医薬品の世界を案内してくれる授業をご紹介します。

▼体験

高齢化が進む現代において身近な病気となりつつある「認知症」。どんな人が認知症にかかりやすいと思いますか？ たとえば政治家は認知症にかかりません。町内会の世話役を進んでやる人もかかりません。しかし、「下着からネクタイまですべて妻まかせ」の人は、定年後に認知症にかかる夫の代表格。つまり、アクティブにさまざまな物事に興味をもってチャレンジする人は認知症にかかりにくい——

11月19日の授業はこんな話題からスタートしました。この授業は三回ごとに担当教員が交代し、それぞれが専門分野について講義するという構成になっており、この日の担当は医歯薬学総合研究科の亀井千晃先生。テーマは「認知症と治療薬」です。受講者は100人近く、教室はほぼ満席でした。

亀井先生は続けて認知症のメカニズムを説明されます。なぜ認知症がおこるのか？ その原因は完全には解明されていませんが、神経伝達物質・アセチル

コリンの欠乏が主要因と考えられています。したがって、アセチルコリンを分解するアセチル

コリンエステラーゼの作用を阻害すれば、認知症の改善が期待できます。それには「ドネペジル」や「ガランタミン」といった薬が使われますが、なんと現在健康食品として売られている「イチョウ葉エキス」にも認知症を予防する作用があることが確かめられているのだとか。

そして話は1995年に発生した「地下鉄サリン事件」に及びます。いたましい被害をもたらした毒ガス・サリンはじつはアセチルコリンを増やす作用があり、それが人体に害をもたらします。神経伝達物質は適量でなければ人体に悪影響が出る。このことに人体の不思議さと薬の本質を垣間見たような気がしました。

化学式が苦手な人であっても、わかりやすいたとえで、そんなり授業についていけると感じました。周りの学生も、身近で深刻な問題だけに、真剣に授業に聞き入っているようでした。

た。

▼ねらいと反響

「認知症や生活習慣病、不眠症など日々の生活に関わりの深い病気を対象に講義することで、健康を維持するために薬の正しい使用方法を学び、実生活で役立つ教養を身につけて欲しいと考えています」と、コーディネーターである医歯薬学総合研究科の川崎博己先生はこの授業のねらいを語られます。「全学部の学生を対象としているので、各教員には、できるだけみくだけ、スライドを使ってわかりやすく講義をしてください」とお願いしていますとのこと。

学生からの評価も上々で、例年100人程度の受講者が集まります。「自分の身近な事柄だから、関心が持てるのでしょ」と川崎先生。

この授業を受ければ、文系でも薬に関する知識を身につけられ、実生活で活かしていきます。まさに総合大学である本学らしい、有意義な授業であるといえます。

科目区分：教養教育 主題科目（健やかに生きる）

時 限：木曜 2限（10:20-11:50）

授業概要：医薬品は病気から健康への回復の手助けとして用いられるが、適正な使用をしなければ、逆に健康を損なうこともある。健康を維持するために、医薬品の持つ多くの情報について身近な病気を取り上げ、その関連から分かりやすく概説する。